

京都・宇治市街遺跡

市街遺跡では最大規模の調査である。

調査の結果、現地表面下約一・五mで江戸時代、その〇・二m下で古墳時代中期から室町時代にかけての各遺構・遺物が多数検出さ

れた。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 所在地 | 京都府宇治市宇治妙楽 |
| 調査期間 | 二〇〇四年（平16）八月—一月 |
| 発掘機関 | 宇治市教育委員会 |
| 調査担当者 | 浜中邦弘 |
| 遺跡の種類 | 集落跡 |
| 遺跡の年代 | 五世紀、九世紀—一九世紀 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |

宇治市街遺跡は、宇治市中心部の中宇治地区とほぼ重複して所在する集落遺跡である。遺跡は宇治川を挟んで两岸に展開し、東岸部

を川東地区、西岸部を川西地区と呼んで区画する。平等院は西岸部にあり、宇治

市街遺跡川西地区は平等院西方に広く展開する。

今回の調査地は、鳳凰堂の西約四〇〇m、中宇治地区の中心部にあたる。調査面積は一三〇〇m²で、宇治

木簡出土遺構はいずれも江戸時代の遺構面で検出された。(1)(2)は廃棄土坑SK九一から出土した。埋土は大きく四層に分かれ、木簡はその最下層に含まれていた。同一層内の共伴土器はないが、そのまま直上の層から一七世紀後半の土師器・陶磁器が出土しており、木簡も概ねその頃のものと考えられる。

(3)は井戸SE一四から出土した。井戸は上部が縦板組無支持、下部が石組円筒形の構造を呈する。直径は〇・八m程と小さい。湧水が著しく完掘できていない。木簡はその最下層で出土し、土器・陶磁器・瓦が共伴した。概ね江戸時代に属するが、最下層では時期の全く異なる一三世紀の土師器なども出土しており、遺構の重複などが考えられるため、木簡(3)の年代特定は難しい。

(4)は直径約一・七mの円形の土坑SK六四から出土した。現存の深さは約〇・三m。掘形は垂直に掘り込まれ、埋土は淡黄色砂の真砂土状である。木簡は土坑中央に正位で垂直に立ち、全体としては埋土内に埋もれた状況であった。木簡下端部は土坑底には直接付かず粘土塊が付着していた。この粘土は木簡を固定するためのものとみられ、木簡据え付け後、砂によって土坑全体を埋めたものと理



(京都東南部)

解できる。木簡の記載内容に基づけば、砂加持の遺構の可能性が考えられる。

なお、調査地は地下水位が高く、木簡をはじめとする木製品が、全時代を通じて極めて良い状態で残っていた。

木簡以外の文字資料としては、墨書土器一点と墨書石がある。墨

書土器は土師器と灰釉陶器の底部にそれぞれ墨書きされ、前者は「二モ」「ナリ」だけが読め、後者は「筑」の一文字が判読できた。土

前半に、灰釉陶器はその諸特徴から一〇世紀前半頃に比定される。字治における墨書き土器の例は、広野廃寺出土の三点。(判読できたのは一

点のみで「安」。土師器皿底部に墨書) しかなく、今回出土の資料は字治の歴史を考える上でも貴重な情報となつた。

墨書きは、平安時代後期の礎石建物の礎石据付掘形から出土した文字は判読できない。材質は砂岩である。



墨書土器



墨書石

廢棄土坑 SK 九一

(1) 「ふりうりの
○袋奉□□うへ

六束之内

197×61×2 011

(2)

林幽庵

(183) × 35 × 3 039

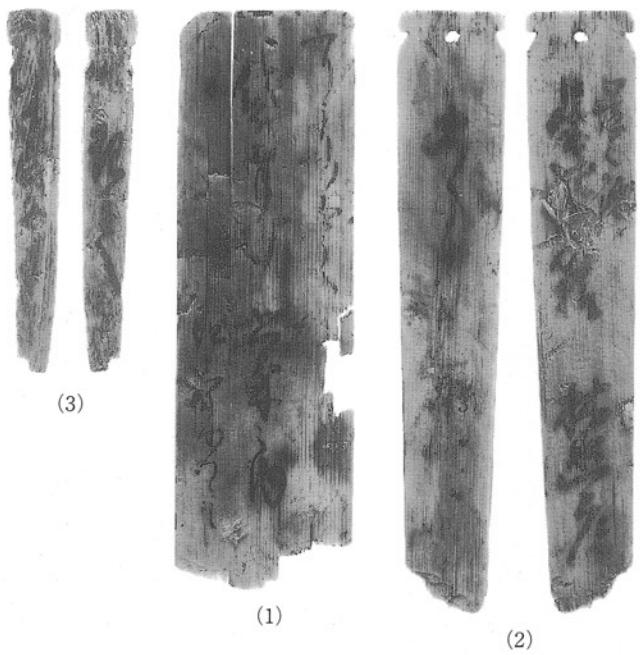
井戸一四

(3) 「き
カ」

円形土坑SK六四

(4) 大安急
明治四十一年八月二十日
午前八時

(278)×93×13 019



(1)は折敷の転用材と考えられる。下部はわずかに原形を保つ。柾目。上部にある穿孔は、墨書面から直接釘状のもので叩いて打ち付けたものと考えられる。「ふりうり」は振り売りの意味か。

(2)は頭部に両側から浅い切り込みを入れている。下部は欠損している。柾目。上部にある穿孔は最低三回穿った痕跡が窺える。星野

宗以（一七九七—一八三九）は宇治茶師の中で最も格式の高い御物茶師で、宇治橋西詰南側に広大な屋敷地をもっていた。林幽庵は管見の限り不明。

(3)は下部に切断の痕跡が認められる。片面だけ丁寧に仕上げている。頭部は両側から台形状の切り込みを入れている。板目。

(4)は上部がやや欠損しているものの、ほぼ完形に近い。上部は山形状を呈する。柾目。「明治四十□年」は、現状では墨が薄れ確認できないが、出土当時の観察知見では、「二」または「三」と判読



(いずれも赤外線画像)

できた。大安を六曜に基づくものとすれば明治四二年八月二〇日となる。「大安喰急」は、「大安」を六曜に基づくもの、「喰急」を「急急如律令」と同一のものと考えると、すみやかに大安になれという念願成就の意味に捉え得る。遺構の状況などから現地において何らかの儀式が執り行なわれたものと思われる。中段の四行はその儀式を執行した吉日時を指示したものであろう。下段の「二大甲」について、同一文字ではないが醍醐寺の「修驗最勝恵印三昧耶法玄深口決」(『修驗聖典』第三篇)に「二大合」の文字が列記された修法がみられる。これは九字法の印法を示したものとされる。これを同一のものと理解するならば、木簡では四回列記されており、印を四回結んだ行為を示したものといえよう。これまで考古学的な類例は管見の限りなく、今後とも課題に挙げ考究していきたい。

なお、木簡の釈読にあたっては奈良文化財研究所の綾村宏・吉川聰・渡辺晃宏・馬場基・山本崇の各氏と宇治市歴史資料館の坂本博士氏、木簡(4)の解釈については天理大学の飯島吉晴氏、また出土遺物の年代観については大手前大学の中井淳史氏と立命館大学の山中信人氏にそれぞれご教示をいただいた。写真は奈良文化財研究所の中村一郎氏の撮影による。

(浜中邦弘・大原 瞳・表原克代)



(京都西南部)

また、奈良時代の古山陰道の側溝と考えられる溝なども検出されている。

京都・内里八丁 遺跡

うちさとはつちょう

1 所在地 京都府八幡市内里

2 調査期間 第一二〇次調査 二〇〇三年(平15)四月~二〇〇四年二月

3 発掘機関 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

4 調査担当者 引原茂治・増田孝彦・高野陽子

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 弥生時代~中世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

内里八丁遺跡は、木津川西岸の自然堤防上に位置する、広範囲にわたる集落遺跡である。こ

れまで第二京阪道建設や府道新設工事に伴って調査が

行なわれ、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認されている。

また、奈良時代の古山陰道の側溝と考えられる溝なども検出されている。